■研究発表論文

# 原宿池田侯爵邸を中心とした私邸庭園設計における長岡安平の思想と実践

Yasuhei Nagaoka's Planning Thought and Practice to Design Private Gardens that Focused on the example of Marquis Ikeda's Residence

浦﨑　真一*　　江下　以知子**

*Shinichi URASAKI　Ichiko ESHITA*

Abstract: This study aimed to examine the planning thought and practice that went into the designing of private gardens by Yasuhei Nagaoka. Based on Nagaoka's statement, in this study, his works were verified using the design documents. A precedent study focused on his planning thought for parks among his works, but the private gardens required unlike these thought. In other words, since private gardens are planned based on architectures that is clearly used to live in, he paid attention to creating harmony between the gardens and the architectures. This is seen from the layouts described in most of architecture places in the gardens planned by him. In particular, most of Nagaoka's designs were realized in the garden he planned for the residence of Marquis Ikeda in Harajuku. He tried using his planning thought on many private gardens, but these could not be carried out completely. Consequently, it was possible to conclude that the garden of Marquis Ikeda's residence is a typical example of a private garden among his works.

Keywords: *Yasuhei Nagaoka, private garden, planning thought, garden and architecture, Marquis Ikeda*
キーワード：長岡安平，私邸庭園，設計思想，庭園と建築，池田侯爵

## １．はじめに

長岡安平は明治から大正にかけて多くの公園および庭園設計に携わり，その数は公園または公共的施設に付随する設計が 102 ヶ所，私庭設計が 85 ヶ所にのぼることが知られる [1]。このうち公園設計に関しては地方自治体等が依頼したもので各地に設計図書が保存されている例がいくつかあり，長岡自身も控えを所持した [2] ことから比較的現存数が多い。

これら公園の設計図書による研究は近年次第に進められており，公園を個別的に対象とした研究として佐藤らによる小樽市の明治期における花園公園の設計についての考察 [3]，小林による札幌市大通，中島公園，丸山公園の公園化の中での長岡の設計検討 [4]，野中による千秋公園および岩手公園の設計から整備，維持管理に至る研究 [5]などがみられる。また，複数の公園設計にわたる研究として，現存する公園設計書 6 点を比較し，長岡の公園設計にかかる思想と特徴を明らかにした浦﨑の研究 [6]がある。

公園以外の公共的施設の先行研究としては，民間企業により開発が進められた台遊園にかかる長岡の設計思想の考察 [7]，靖国神社地の改修における思想と，設計および実現についての研究 [8]などがみられる。

一方で私邸庭園の設計は多くが現地での口頭指示によるものであった [9]ため，設計図書がまとまって残されている事例が公園ほど多くなく，長岡安平の庭園設計を扱った研究はみられない。しかし，長岡の言説を集めた『祖庭 長岡安平翁造庭遺稿』[10]（以下，『遺稿集』）には，主目的となる建築を有する敷地への庭園築造において，設計にかかる思想の記述が散見される。また，長岡安平史料群 [11]（以下，「長岡史料」）には，原宿池田侯爵邸（以下，「池田邸」）をはじめ，建造物平面図を含む庭園の設計図書が複数存在している。

こうした私邸庭園は，必然的に既に存在する建造物や，同時的な建造物の建設などへの配慮が想定されるが，上述のように，これまで比較的建造物に対する記述の少ない公園関係史料を中心に検討が進められてきており，こうした長岡の庭園と建築とのかかわりのなかでの業績は研究対象とされてこなかった。本研究は，まとまった史料を有する池田邸の業績およびその他の長岡史料に残る庭園設計図書，『遺稿集』に収録された言説から，長岡安平の私邸庭園設計における庭園と建築の関係性をはじめとする思想と，その実践について明らかにすることを目的とする。

## ２．長岡安平の私邸庭園設計思想

### （１）「長岡史料」における私邸庭園関連史料とその特徴

「長岡史料」中の 258 点の図面には，私邸庭園の設計およびそれにかかわるとみられる史料が 33 点含まれており，その内訳は，集合住宅図 5 点を含む庭園設計図 18 点，建築設計図 15 点である。庭園設計図のうち敷地全体を収録したものは，久米氏庭園にかかわる図が 1 点および池田邸にかかわる図が 4 点あるのみである。池田邸についてはこのほかに邸宅と邸内社の平面図各 1 点が残されている。また，『遺稿集』には久米氏および池田邸の庭園設計図に体裁が類似した，相馬子爵邸庭園の設計図が収載されている。「長岡史料」には写真も含まれ，相馬子爵邸，池田邸，土田邸などの庭園写真 23 件が存在し，これらの写真の一部は長岡の作品として『遺稿集』に掲載されている。

図面の特徴として，建築平面図の多さと，庭園設計図中の建築概形図の詳細さがあげられる。建造物に先立って庭園が設計された久米氏の庭園設計図には邸宅の位置が文字で記されているのみであるが，このほかのすべての庭園設計図で建造物の概形線が記されている。特に池田邸では複雑な邸宅の概形線と部屋の用途および配置が，相馬邸や集合住宅図では建築平面図が縮小記載されている。なお，官舎や公会堂など「長岡史料」に含まれる公共的施設に関する図面 8 点にも建築平面図，または庭園設計図に建築平面図が縮小記載されており，このほか西本願寺飛雲閣とみられる立面図，平面図が各 1 点ずつ存在する。

次項では，これら史料からうかがえる庭園設計における長岡の

*株式会社公園マネジメント研究所　　**株式会社文化財保存計画協会

建築への関心について，長岡の言説をみていくこととする。

（2）『遺稿集』にみる長岡の私邸庭園設計の思想

長岡は『遺稿集』において，冒頭に「庭園の必要」，続けて「建築と庭園」「庭園概説」「庭園の設計」「郊外住宅と別荘の庭」などの項で，庭園設計と建築との関係について言及している。まずこの中で，「緑滴り芳香満ちて居る優雅な庭あってこそその建築物は生きて来る」ものであり，「純然たる事務用の建物は知らず，苟くも人の住む家である以上は庭園なしに完全なものと云ふ事は出来」ず，「庭園は客室，書斎のみに付属したものでなく家屋全体の庭であり，家庭全体の庭園であるべき」であるという考えが主張される[12]。そこで，建築は庭園との調和によってこそ完全なものとなること，庭園は少なくとも住宅建築には必須のもので，家庭本位のものであるべきことなどの基本的な考え方を知ることができる。

こうした考えは繰り返し述べられるが，さらに長岡は，近代では「建築と造庭とが殆んど没交渉」におこなわれているため，建築家は「家屋を建築するに先立って，建物と庭園との関係を熟考せねばなら」ないと指摘し，造園家も，「今日に於ては造庭の専門家，所謂お庭師に相当すべき造庭家を失っ」ており，「全体としての調和を考えて，完全なる設計を行ひ得るものは皆無」だとする[13]。また，こうした状況を改めるため，「予め調和を考え」，「造庭上の意見方針を定め」，「造園費を建築費と共に，当初に於て考えて置く」必要があり，これによって庭園は「建築物と調和して見る人に美観を与へ，建築物の美観を一層増すのみならず，又建築物の短所を補う」ことを示している[14]。

こうした議論はさらに「一 樹木」「二 玄関先の庭」「三 客庭」「四 洋館の周囲」「五 花壇」「六 果樹園と蔬菜園」「七 養鶏場」「八 池」「九 運動場」の各項や，「郊外住宅と別荘の庭」の章で具体的な設計上の要点として記され，各項目からは長岡の理想とする私邸庭園の要素を知ることができる。ここでは挿花のある座敷から見える庭園内には花木を用いないことや，客庭は主人の人格，家の品位を表すといった伝統的な生活様式を踏襲しつつも，花壇が児童の教育上有意義なものであること，庭園で採れた魚や野菜，果物等を食し，また手土産に用いることが「家庭の和楽を増す」ことなどを意図している。このため池や蔬菜園の設置が望ましいことを述べ[15]，先述の基本的な考え方と合わせて，家族が「使う」[16]ための庭園を志向していることがわかる。

一方，眺望への配慮としては，洋館は窓越しに庭園を見るため「窓毎に幾分づゝ景色の変る様に作ると趣があ」り，「遠景が常に正面に現れぬようにする事」に注意すべきで，遠景の眺望が得られる部屋を限定したり，あるいは前景に植樹し樹の間から遠景がみられるようにしたりする事で変化のある，趣深い眺望となることなどが述べられている[17]。

このように繰り返される言説や，長岡史料における私邸庭園および建築関連史料と設計事例の多さからみても，公園設計のみならず，私邸庭園設計も，長岡の造園に対する思想の重要な一画を占めていたといえる。しかし，個人の庭園という性質上，業績ごとの残存史料が少なく，その思想の実践過程を知ることは難しい。そのような状況で，池田邸は前項の長岡史料以外に，建造物関係の史料もまとまって残存している貴重な事例であり，こうした思想に基づく実践の一端を知ることができる。

## 3．原宿池田侯爵邸庭園と関連史料

### （1）原宿池田侯爵邸

池田侯爵家は江戸時代を通じて鳥取藩を治め，明治17（1884）年，13代輝知のときに侯爵となり，華族に列せられた。池田邸は，同家が文久 2（1862）年に取得した亀井隠岐守青山隠田屋敷[18]の地に，14代の侯爵池田仲博が建設した邸宅である。敷地の取得後まもなく 12 代慶徳によって造成された御鷹場には，明治 8（1875）年に明治天皇の行幸があり，華族の間で名高いものであった[19]。

池田氏が本邸を当地へ移したのは大正6（1917）年で[20]，移転のための邸宅および庭園の設計は明治 45（1912）年には始められていた[21]。本邸の整備にともない鴨池の引き堀は埋め立てられ，ここに御鷹場としての役割を終えた。その後，昭和 12（1937）年には敷地内に海軍館が建設され[22]，昭和 15（1940）年には東郷神社が創建[23]，残されていた邸宅も昭和 20（1945）年に戦災により焼失した。「当時貴族邸宅の標本」とされた[24]池田邸が本邸とされた期間はわずか 20 年であるが，長岡安平の庭園設計以来完成までの間にいくつかの変遷があるため，各時点での史料を参照し詳細をみていきたい。

### （2）池田邸庭園の設計図書

長岡史料には池田邸設計関係図のうち庭園に関するものとして「敷地図（青山別邸）」（以下，「敷地図」），「青山別邸略図」（以下，「略図」）および「池田家庭園設計図」（以下，「庭園設計図」）と，「池田家建造物及び周辺計画原図」（以下，「計画原図」）の4点，建造物に関するものが「池田家平面図」，「池田家神殿略図」の 2 点残されている[25]。

各図の特徴からそれぞれの関係性を整理すると，「敷地図」は設計の元となる現況図，「略図」はこれをもとに作成した簡易な現況図に設計方針を記入した設計指示図，設計のために敷地を転写したと考えられる「計画原図」，そして設計完了の図である「庭園設計図」となる。また「池田家平面図」の概形は「計画原図」と「庭園設計図」に，「池田家神殿略図」の概形は「庭園設計図」に記入されている。長岡の設計図書は基本的に設計図，設計書，参考図からなることが知られており[26]，設計の方針と細部の指示は設計書にまとめられている。池田邸の設計書は現段階でみつかっていないが，「略図」のように図に直接設計についての詳細事項を書き入れた例はこれまでにみられない。庭園の設計図書は先述のとおり確認できる史料が少ないが，この設計手順は池田邸庭園設計のひとつの特徴である。

### （3）池田邸邸宅建築関連史料

池田邸邸宅は，外観を和風に統一した内部和洋館並立型の邸宅建築[27]で，和館部分を辰野金吾率いる辰野葛西事務所，洋館部分を田辺淳吉が技師長を務める清水組（現，清水建設）がおこなうなど，複雑な過程をたどって建設された[28]。これに関連する史料として，前述の長岡史料中の建造物平面図2点と写真4点[29]，辰野葛西事務所の業績として『工学博士辰野金吾伝』[30]，『建築雑誌』348 号[31]および『建築画報』第 11 巻 4 号[32]，清水組の業績として『建築雑誌』第 35 輯 411 号[33]，『田辺淳吉氏作品集』[34]，『西村好時作品集』[35]および清水建設所蔵の池田邸関連史料[36]がある。

長岡史料中の「池田家平面図」は，和洋館が一体的に描かれた本邸の 100 分の 1 平面図であり，写真は邸宅の竣工後を写したものである。

辰野葛西事務所に関連する『工学博士辰野金吾伝』および『建築雑誌』348 号は業績リストであり，同事務所の池田家邸宅への関与の事実がわかる。また，『建築画報』第 11 巻 4 号は「池田侯爵家青山原宿御邸日本館建築設計変更図，平面図」「同 御居間御隠居南面及北面建図」「同 御居間廻り女中部屋西面建図及応接室，運動場等各南面建図，玄関，女中部屋，事務室等各北面建図」「同各部断面」と題された 4 件 7 点の図面を収録している。

清水組に関連する史料の内，『建築雑誌』第 35 輯 411 号，『田辺淳吉氏作品集』，『西村好時作品集』は写真を含めた竣工後の作品紹介で，『建築雑誌』には邸宅平面図，立面図，断面図が含まれている。清水建設所蔵の池田邸関連史料は，同社が担当した池田邸本邸および付属施設の設計図類で，大正 5～7（1916～18）年

の「池田侯爵邸増築」4件，および「池田侯爵邸門及門番所」，昭和7（1932）年の「池田侯爵邸表門」「池田候邸神霊殿」，昭和16～17（1941～42）年の「池田侯爵邸防空壕」の計7件101点におよぶ図面群である。

このように，池田邸は建造物についてもまとまった設計図書が残されている。しかし，複数の設計主体が存在すること，長岡史料中の池田家平面図が辰野葛西事務所および清水組の邸宅平面図と一致しないことなど，検討すべき点も多い。特に池田邸の邸宅設計の変遷については庭園に比べて複雑な過程をたどっていることがわかり，建設された邸宅に一定の設計方針が存在し継承されたか，あるいは長岡の庭園設計段階での邸宅設計がどのように位置づけられたかという課題が，長岡の私邸庭園設計の実践を明らかにするうえで重要な視点である。そこで次章では，まず長岡の庭園設計の過程を明らかにし，これらの設計図から建築設計の過程を明らかにしたい。

## 4．原宿池田侯爵邸庭園と同邸宅の設計過程

### （1）長岡安平による池田邸庭園設計

長岡史料中のうち「敷地図」には，依然南側低地に8本の引き堀を備えた鴨池が確認できる。「略図」は長岡が「敷地図」の現況をもとに設計方針を記した図で，茶亭のほか建造物は確認できない（図-1）。また，両図の舌状の台地部に書き込まれた朱枠線の位置は，「庭園設計図」中で建造物の概形線が描かれている場所であり，邸宅の位置を示すことがわかる（図-2）。

「略図」には，地形の改変，施設の移転および設置，植栽等の指示がみられる。このうち多くを占めるのが池の形状変更や新設，水路の変更，斜面の形状変更といった地形の改変をともなうものである。中でも大きなものは池の改修で，引き堀を撤去し滝口や乗船場を設け，鴨池から遊船池へと変更されている。さらに池周囲の地形は台地南端などにおいて，特に北側を中心に削るという指示が散見される。これらの指示は，池の水面と岸の高さの差をできるだけ小さくしたいという記述に基づくことがわかる。

邸宅の周囲には芝生地や，神殿，水田が計画され，池の北東の平地にテニスコートや運動器具などが確認できる。邸宅の軸線は池に向けられ，池とテニスコート等の間の植栽は残されている。

「略図」の方針と「庭園設計図」を比較すると，まず池の形状は方針通り改修され，滝や乗船場も計画されている。門から玄関に向かい緩やかな曲線を描く馬車道がつけられ，広く取った馬車回しと供待ちが設けられている。台地からの斜面や馬車道脇には園路がめぐらされている。神殿の周囲は多数の樹木が植えられ，隣接して，「略図」では設置箇所未定であった蔬菜園と花壇が描かれている。一方テニスコートと運動器具は設置されず，芝生のある疎林地に変更となった。ただし邸宅との間は並木とされ，敷地周囲にも樹木が列植されている。

以上のように，「略図」の方針が「庭園設計図」にすべて反映されたわけではない。そこで，「略図」と「庭園設計図」は，先行研究で明らかにされた長岡の公園設計における設計書と設計図のような補完関係にある史料ではなく，「略図」は「庭園設計図」への過程であることが明らかである。

### （2）設計図書にみる建造物設計の変遷

「長岡史料」には，邸宅図として「池田家平面図」のほか，「庭園設計図」にも部屋の用途および配置が記された建築概形線が描かれている。「池田家平面図」には，洋館の客室，和館の床や棚を備えた座敷などの接客空間が庭園に面して配置され，北側は東寄りに車寄せのある洋館の正面玄関，西寄りに和館の玄関，これを接続する事務所部分などからなる（図-3）。こうした玄関構成や室名の記述から，主に公的接客を中心とした洋館，家庭生活と私的社交の場としての和館，華族としての家政実務を行う事務所が構想されていたことがわかる。また，この段階では洋館と和館の接続区域に，貴賓の滞在室と考えられる付添人室や食堂，便所を備えた区画がある。「庭園設計図」の概形線は，ほぼこの平面図の輪郭を正確に縮小転写したものだが，庭園側の空間に「客室」「書斎」などの用途が書き込まれていることが特徴である。

しかし，『建築画報』掲載の辰野葛西事務所の平面図の形状は，これと異なっている（図-4）[37]。建造物の軸線および，和館の正面部分に事務棟，北側に女中室や居間などがあるという基本的な空間構成は同じだが，規模が縮小し，わけても貴賓滞在所と考えられた部分や床棚を備えた正式な接客空間が消失あるいは縮小している。図題は「池田侯爵家青山原宿御邸日本館建築設計変更図，平面図」とされており，当初図にあたるものは掲載されていないが，規模が縮小されながらも，平面計画の基本方針は長岡史料の平面図から維持されていることがわかる。

清水組の洋館部分も，長岡の平面図に比べ規模は縮小し，楽器室や大食堂，南側と東側を取り巻くテラスのような廊下が消失している（図-5）[38]。一方，客室の位置や庭園へのアプローチの位置は維持され，南東角に張りだしていた客室はガラス張りの広縁となり，東側廊下は同側客室の大きなガラス窓に代わるなど，庭園への接続と眺望を重視した方針は変わっていない。特に広縁の二階には，南東に眺望の良い張り出し窓と，高欄の巡ったガラス張りの廊下を持つ和風の客間が設けられており，より眺望を重視した接客空間がつくられたことがわかる。

長岡の同邸への関与は，辰野葛西事務所が池田邸にかかわった明治45，大正元（1912）年とされているが，前述の辰野葛西事務所の業績リストは，大正元年9月に教養所と主任住宅を設計し，大正3（1914）年に日本館を設計完了，工事中で，洋館は同年に設計中止し，予算も作成しなかったと記載している。長岡史料の平面図は高い完成度を見せていることから，この段階ですでにいずれかの建築技術者の手で完了した和洋館の平面設計が存在したことがわかるが，これが辰野葛西事務所によるものか，他の建築家によるものかは現段階で明確にすることはできない。

## 5．長岡安平の私邸庭園設計思想の実践

### （1）池田邸庭園と邸宅の実現

池田邸庭園の施工状況を知ることのできる史料としては，「池田侯爵御邸及付属地配置図」[39]（図-6，以下，「配置図」）が確認できる。「配置図」は，清水組が昭和6（1931）年に請け負った池田邸表門改築の設計図書中の1枚であり，この時点での庭園と建造物の状況を示している。また，公文備考[40]には，昭和10（1935）年頃池田邸敷地内に海軍館が設立されるにあたり[41]，池田邸の現況図に計画線を重ね合わせて作成された建物配置案が収録されており，「配置図」と一致する現況図が確認できる。また，わずかながら池田邸の状況を撮影した写真史料も残されているため，これらによりおおよその設計の実現を知ることができる。

まず，池は引き堀が埋め立てられ，鴨池としての機能を失っている。池田侯爵の娘徳川幹子が，引き堀を埋めて家を建て，鴨場の名残の池で，ボート遊びをした[42]と回想しており，図に池の北岸に乗船場とみられる突起も描かれているため，設計どおり鴨池から舟遊びのできる池へと変更されたことがわかる。写真-1には池畔に乗船場とみられる足場と小舟があり，奥の茅葺屋根の建物や左の島の位置関係から，これが池の南西から北東方向を撮影したものとすると「配置図」と合致する。

「配置図」では馬車道がつけられ，池の周囲や庭園内に園路が巡らされている。北西角には設計時の形状を踏襲した邸内社が設けられ，邸宅と邸内社の間の花壇，蔬菜園が設計された場所には整形された圃場が並ぶ。写真-2には奥に作業をする人影のある畑と，脇に細い流れが写っている。馬車道と池の間の芝生の疎林

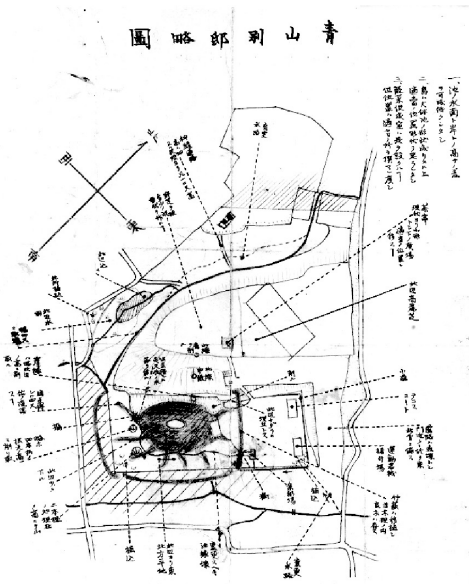
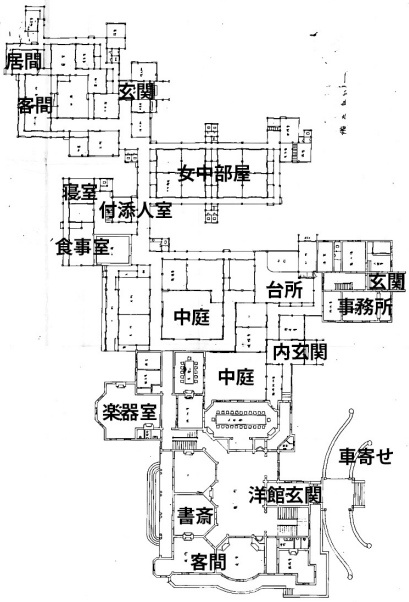
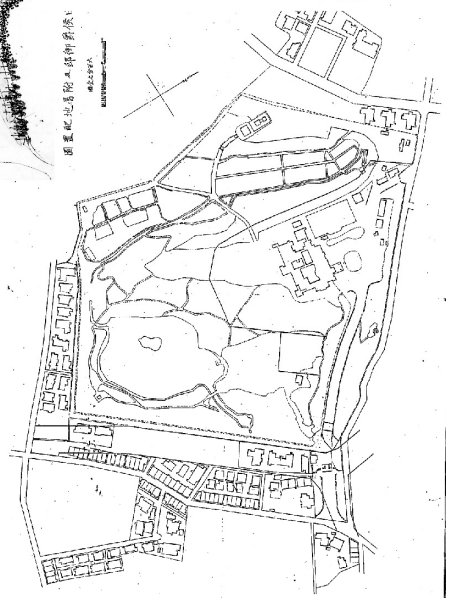
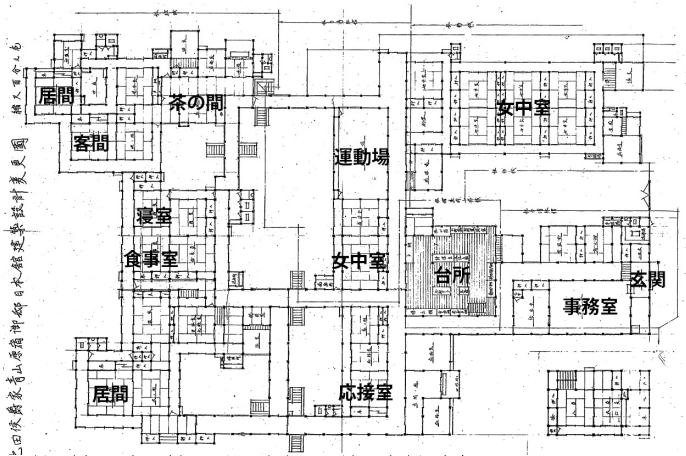



図 - 1　青山別邸略図





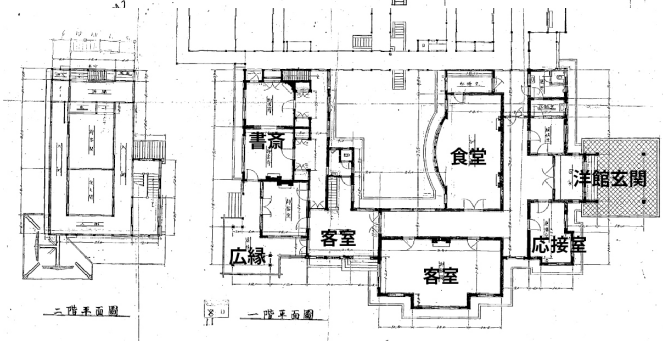




図 - 3　池田家平面図に室名加筆（上）
図 - 6　池田侯爵御邸及付属地配置図（下）

図 - 2　池田家庭園設計図（上）
図 - 4　池田侯爵家青山原宿御邸日本館建築設計変更図（中）
図 - 5　池田侯爵邸（下）　図-4, 5 は室名加筆

地では，設計段階では運動器具とテニスコートの設置が不採用となったが，遊具で遊ぶ児童らの姿を写した大正 8（1919）年の写真[43]がある。

徳川幹子は，自分たちは鬼ごっこや木登りをしていたが，弟のころはテニスなどの球戯をやるなど遊びが多様化し，父侯爵が用具を揃えてくれた[44]と回想しており，庭園内には侯爵の意向もあってこうした施設も設けられ，児童らの楽しみに供されていたことがわかる。以上のことから，庭園における長岡の設計は，「庭園設計図」に示された施設配置とそれぞれの形状および用途において，概ね実現されたことが明らかである。

一方邸宅については複数の史料に竣工後の紹介記事がみられるため，庭園に比べ実現について明確である。辰野葛西事務所の関与として大正 3 年の段階で和館を設計および工事中であり，『建築画報』大正 10（1920）年 4 月号所収の図面[45]により，和館の工事はこれまでに同事務所の仕事として竣工したことがわかる。

また，清水組が担当した洋館については，設計図書が大正 5〜7 年の日付であり，『建築雑誌』では大正 8（1919）年 7 月 16 日竣工とあるが[46]，『田辺淳吉氏作品集』の解説によれば，西村好時が担当した車寄せと庭正面外観は大正 9 年竣成とあり[47]，いずれにせよ大正 9 年までには同邸の全容が完成したものと考えられる

写真 - 1　旧鴨池付近

写真 - 2　蔬菜園

写真 - 3　御殿を望む

（表 - 1）。

長岡の庭園設計における思想について，『遺稿集』には先述のとおり，個別要素についての記載がある。この中で長岡は，洋館の周囲には青々とした芝生に花卉をあしらい，花壇は美しさのみではなく，果樹園や蔬菜園とともに児童に自然への興味を起こさせ知識を与えると奨める。池は庭園に一段の趣を添え，大きければ舟遊びもできるとし，また運動器具や砂場，丈夫な樹木を備えた運動場を児童のためにつくるとも述べる[48]。こうした多様な庭園は，家庭生活の価値が認められる時代となり，庭園も従来の眺める庭から家族それぞれに満足を与えるものへと変わらなければならないとの考えに基づくもので，家族それぞれが「自ら労して己の持場を全うしながら，全体として多趣味多方面な家庭的庭園を維持し，改良してゆく所に，真実の家庭の楽しさが現れてくる」[49]としている。注目すべきことは，華族邸宅である池田邸にもその思想が適用され，また施主である侯爵自身も，邸宅の建築や利用の過程でこうした思想に基づく方針を維持し続けたことである。

また，邸宅の竣工写真などからは，長岡の思想に基づく庭園と建築の関係をうかがうことができる。すなわち，前述の『遺稿集』で述べられた，趣深い眺望のためには建造物からみえる遠景は樹の間から眺めるようにすることが望ましいというもので，写真 - 3 にはその言葉を裏付けるように，洋館側の二階からの遠景を樹間に眺められるように植えられたマツが確認できる。

庭園と邸宅の関係については，4 章で述べた通りすでに「敷地図」の段階で邸宅の位置や軸線など，大枠の方針は決定されていた。その位置はそれまで建造物のあった鴨池のすぐ北東ではなく，舌状の台地部で，軸線は池に向いていた。「略図」では，特に池の北側斜面の肩を中心に削るという指示が散見され，北側に集中してみられることは，次のように邸宅からの庭園の眺望に関わるものと推察できる。

「敷地図」の邸宅概形はほぼ位置のみを表す朱枠だが，この朱枠の南西角に突出した部分があることに着目する。「庭園設計図」のより正確な平面図でも，この南西角の突出は維持され，この部分の居間および次の間のある寝室から，食堂および便所と付添人室の付属する寝室，そして洋館へと全体として各棟が雁行し，邸宅が池側斜面に向いて開かれている。これにより池側に面した部屋からの庭園への眺望が確保されており，とりわけ「敷地図」段階から突出させた位置に貴賓の滞在を想定した区画を設計し，少なくとも大正 3 年以降の辰野葛西事務所，清水組による実際の建築設計が，この平面計画の基本方針を踏襲しておこなわれ，邸宅の設計変更ののちもこの位置の役割を維持し，空間構成の方針を受けついでいることがわかる。

清水組の洋館部分に関して，『建築雑誌』および『田辺淳吉氏作品集』に興味深い記述がある。それは，和館部分を設計，建設したのが辰野葛西事務所であったにもかかわらずその点に一切の言及がなく，外観を和風に統一し内部を和洋に分けるという基本方針から平面計画まで，ほぼ施主池田侯爵のものであると表現している点である[50]。ここから清水組が邸宅設計の方針を施主池田侯爵自身のものと考えていたことがわかる。

以上のことは，長岡が庭園の眺望を重視し，庭園と建築の設計において必要と述べた要件の実現であり，設計者が交代する中でも，庭園との関係を含めた邸宅の基本的な設計方針と思想を，施主の池田侯爵も理解し実行した結果であるといえる。これが最後にかかわることになった清水組においても，侯爵自身の設計方針という認識が形成されながら，実現にいたったと考えられる。

表 - 1　原宿池田邸整備の時系列

| | |
|---|---|
| 明治45(1912)以前 | 邸宅設計(設計者不明) |
| 明治45(1912)頃 | 長岡・辰野葛西による原宿邸宅および庭園の設計始まる |
| 大正3(1914) | 辰野葛西による日本館設計完了・工事中、洋館設計中止 |
| 大正5(1916) | 清水組による洋館設計始まる |
| 大正6(1917) | 本邸を原宿へ移す |
| 大正9(1920) | 洋館ほか竣工 |
| 昭和12(1937) | 敷地内に海軍館建設 |
| 昭和15(1940) | 東郷神社創建 |
| 昭和20(1945) | 戦災により邸宅焼失 |

### （2）長岡の私邸設計における庭園と建築の相互関係

池田邸ほどまとまった史料が残されている事例は現在において他にみられないが，いくつか残された史料から，長岡の私邸設計における庭園と建築の相互関係について考察したい。

庭園の一部を設計したと考えられる松本金太郎邸の図面[51]および集合住宅図[52]，あるいは『遺稿集』所収の相馬子爵邸庭園の図面[53]などには，正確な建造物平面が描かれている。松本邸では縁側に沿った複数の飛石の行程がみられ，また相馬子爵邸は池田邸同様，邸宅周辺の視線を遮る植樹の計画と実施が写真により確認できる。集合住宅図では，便所や玄関といった施設と植栽の組み合わせにパターンがみられる。これらから，長岡は私邸庭園において程度の差はあれ，池田邸で実現し，『遺稿集』で言説化していた建築との調和を重視した設計をおこなっていたと考えられる。

手記からは，こうした思想による私邸庭園の設計が施主や大工などとの協議により行われたことが伺える。明治 44（1911）年に秋田で池田氏，江畑氏の庭園を設計した際の記述には，「また建築之件ニて，種々協議を尽す。今回ハ庭園より建築之件，多々有之。」（池田氏），「同家も矢張建築之要件多ク，浴室・便所・廊下等之建築，其他書院等設画に付て，種々協議ヲ尽す。」（江畑氏）とある。特に江畑氏邸では，当初設計に従って着工中の現場を視察したことがわかり，協議の翌日，長岡は図案を修正し，庭木，門の位置を変更している[54]。

しかし官庁や公会堂，銀行など公共的施設の事例では，明治 42 年の三秀園の事例のように，長岡の考証により庭園主導での景観復元が行われた事例もあるものの[55]，池田邸和館を建設した辰野葛西事務所建設の明治 44 年の盛岡銀行庭園設計の際は，建物がほぼ完成した段階で招聘され[56]，『遺稿集』に「建築と造庭とが殆んど没交渉」という建物竣工後に庭園が設計される状況もあったことが確認される。

以上のことから，長岡は『遺稿集』等で明らかにしている自身の庭園設計における思想，すなわち庭園と建築の調和された設計

を，建造物をともなう庭園の基本的な姿と考え，施主との協議や意思疎通が比較的容易な私邸庭園においてできうる限り実践しており，史料上確認することができるその最も実現された事例のひとつが池田邸であるといえる。

## ６．まとめ

「当時貴族邸宅の標本」と評された池田邸は，邸宅建築に複雑な設計の変遷がみられたにもかかわらず，施主池田侯爵の理解もあり，長岡の当初設計案に示された庭園と建築の関係性が実現した。『遺稿集』に示された庭園と建築の関係性を重視する思想は，長岡史料中のほとんどの庭園設計図に建築概形または平面が描かれていることから実践を読み取ることができたが，実現についての確実な史料は残されていない。こうした状況の中，複数の建築系の雑誌や設計者の作品集に取り上げられた池田邸は，まさに当時の邸宅の標本として認識されていたことを傍証するとともに，長岡の私邸庭園設計における思想の実現が確認できる業績の典型でもあるといえる。

本研究では，特に公園設計において先行して研究が進められている長岡安平の業績のうち，私邸庭園に着目して，庭園と建築の関係性をはじめとする思想と，その実践について明らかにすることを目的とした。これについて多くの設計図書の中に実践の形跡をみることができ，池田邸において実現が確認できた。この中で池田邸での実現に，長岡の思想に対する施主池田侯爵の理解と建築家による継承があったように，長岡を取り巻く人的交流の影響も看過できず，実現との関係性の検証は今後の課題である。

謝辞：本研究にあたり，清水建設株式会社より資料をご提供いただいた。ここに記して謝意を表する。

### 補注及び参考文献


1）浦﨑真一（2014）：長岡安平の官歴を中心とした経歴区分による設計業績の変遷について：ランドスケープ研究 Vol.77No.5，407-412

2）浦﨑真一（2013a）：長岡安平の設計図書についての調査：都市公園 203，36-39

3）佐藤雄紀・越澤明・坂井文（2009）：小樽市における明治期および昭和初期に整備された主要公園の計画について：日本建築学会技術報告集第 15 巻第 29 号，313-316

4）小林昭裕（2014）：札幌市大通りにみる広幅員街路の公園化における社会文化的視点からの史的考察：ランドスケープ研究 Vol.77No.5，633-638，小林昭裕（2015）：中島公園にみる都心に隣接した氾濫原の公園化における社会文化的視点からの史的考察：ランドスケープ研究 Vol.78No.5，419-424，小林昭裕（2016）：円山公園にみる都心郊外山麓の公園成立と変遷に関する社会文化的視点からの史的考察：ランドスケープ研究 Vol.79No.5，425-430

5）野中勝利（2015）：近代の秋田（久保田）城址における公園設計・改良設計後の秋田県による公園整備の経過：ランドスケープ研究（オンライン論文集）Vol.8，45-57，野中勝利（2016）：岩手県による岩手公園の整備と維持管理における長岡安平による公園設計の受容性：都市計画論文集 Vol.51.No.1，108-117

6）浦﨑真一（2015）：長岡安平の公園設計書にみる着眼点の傾向と設計思想：ランドスケープ研究 Vol.78No.5，413-418

7）津田礼子（2003）：長岡安平の公園デザインの特質：活水論文集第 46 集，19-38

8）浦﨑真一（2016）：大正時代の靖国神社地改修における長岡安平の設計案とその実現：ランドスケープ研究 Vol.79No.5，413-418

9）浦﨑真一（2013b）：長岡安平の手記にみる公園設計の旅程に関する研究：ランドスケープ研究 76(5)。私庭については設計図書の作成の無い場合も多いが，本論で取り上げる池田邸については設計図書があり，建築設計も含むため設計の用語を用いる。

10）井下清（1926）：祖庭　長岡安平造庭遺稿：文化生活研究会

11）東京都公園協会みどりの図書館東京グリーンアーカイブスが所蔵する，長岡安平の親族寄贈による遺品史料群。

12）～17）井下清（1926）：前掲書，p.8,22／p.10,18／p.10／22-30／p.21／p.26,50,51

18）鳥取県立博物館編（1988）：贈従一位池田慶徳公御伝記二，p.92

19）東郷神社（1984）：東郷神社誌，p.68

20）徳川幹子（1984）：わたしはロビンソン・クルーソー：茨城県婦人会館，p.55

21）浦﨑真一（2014）：前掲書，p.409

22）齋藤義朗（2013）：帝国海軍の博物館「海軍館」：政治経済史学：日本政治経済史学研究所，1-16

23）東郷神社社務所（1940）：東郷神社略誌，p.6

24）中村勝哉編（1950）：西村好時作品譜　自大正五年至昭和二十五年：城南書院，p.79

25）東京都公園協会所蔵【件名】敷地図（青山別邸）／青山別邸略図／池田家庭園設計図／池田家建造物及び周辺計画原図／池田家平面図／池田家神殿略図【収録先の名称】長岡安平史料群【請求番号】ny0759／ny0628／ny0594／ny0732／ny0780／ny0589

26）浦﨑真一（2013a）：前掲書

27）伊藤康晴（2004）：仁風閣の周辺―白亜の洋館と池田侯爵家のあゆみ―，p.26

28）松波秀子（2009）：田辺淳吉と明治から大正の清水組設計組織の研究：東京大学博士論文

29）東京都公園協会所蔵【件名】池田侯爵邸庭園（府下原宿／府下原宿　旧鴨池付近／府下原宿　蔬菜園／府下原宿　御殿を望む）【収録先の名称】長岡安平史料群【請求番号】ny0194

30）白鳥省吾（1926）：工学博士辰野金吾伝：辰野葛西事務所

31）日本建築学会（1915）：建築雑誌：29 輯 348 号

32）建築画報社（1920）：建築画報：第 11 巻 4 号,5 号

33）日本建築学会（1921）：建築雑誌第 35 輯 411 号

34）佐藤功一（1921）：田辺淳吉氏作品集：洪洋社

35）中村勝哉編（1950）：前掲書

36）清水建設所蔵【件名】池田侯爵邸増築（大正 5-7 年）／池田侯爵邸増築（大正 7 年）／池田侯爵邸増築（大正 7 年）／池田侯爵邸門及門番所／池田侯爵邸表門／池田侯邸神霊殿／池田侯爵邸防空壕【工事番号】838／838／838／842／1378／1379／2387

37）同一の図が清水建設所蔵池田邸関連史料に収録されており，画質の都合上清水建設所蔵のものを使用。

38）清水建設所蔵【件名】池田侯爵邸【収録先の名称】池田侯爵邸増築（大正 5-7 年）【工事番号】838

39）清水建設所蔵【件名】池田侯爵御邸及付属地配置図【収録先の名称】池田侯爵邸表門【工事番号】1378

40）アジア歴史資料センター所蔵【件名】海軍館設立の件 1（5）【収録先の名称】公文備考 昭和 10 年 S 団体法人巻 2 附属 1（防衛省防衛研究所）Ref.C05034643300

41）アジア歴史資料センター所蔵【件名】海軍館設立の件 2 止（5）【収録先の名称】公文備考 昭和 10 年 S 団体法人巻 3（防衛省防衛研究所）Ref.C05034644800

42）徳川幹子（1994）：絹の日土の日：PHP 研究所，61-62

43）～44）徳川幹子（1984）：前掲書，口絵／76-77

45）建築画報社（1920）：前掲書

46）日本建築学会（1921）：前掲書

47）佐藤功一（1921）：前掲書

48）～49）井下清（1926）：前掲書，26-30

50）日本建築学会（1921）：前掲書および佐藤功一（1921）：前掲書

51）東京都公園協会所蔵【件名】神田区猿楽町松本金太郎邸庭園図【収録先の名称】長岡安平史料群【請求番号】ny0808

52）東京都公園協会所蔵【件名】宅地区画及び植栽図【収録先の名称】長岡安平史料群【請求番号】ny0743，ny0725，ny0755，ny0802，ny0763

53）井下清（1926）：前掲書，p.86

54）東京都公園協会（2012）：長岡安平手記翻刻，p.52

55）東京都公園協会所蔵【件名】三秀園と陳列館／三秀園の復旧工事／三秀園の復旧工事（承前）／三秀園の実地踏査【収録先の名称】長岡安平史料群【請求番号】ny0131／ny0132／ny0133／ny0134

56）東京都公園協会（2012）：前掲書，143-146